

数学 ～無限に広がる思考の世界～

竹平咲希

神戸山手女子高等学校

私は小さい頃から人と話すことが苦手だった。人と話すと思考が遮られる。話を聞く、答えを考える、相槌を打つ、表情をつける、相手の気持ちを考える、体の動きを考えるなど、やるが多すぎて、自分が何を話したいのか分からなくなってしまう。ここに、歩きながら、食べながらというような日常の作業がともなうと更に混乱する。だから、本当に話したいことがある時は文字でやり取りするようになった。考える、入力する、送る、受信して読む、考える、返信を入力する、これらはどれもシングルタスクなのでスムーズに行える。私と接するほとんどの人は、私の中に複雑な思考があることを知らない。会話が拙いため、内面を知ってもらう機会がないからだ。最近は面倒なので、別にわかってもらわなくていいと思うようになった。どうしてもコミュニケーションを取りたいと思える人とだけ、文字のやり取りを通じて分かってもらえればいい。

私は自分の外側ではなく、内側に無限の世界を広げるようになっていった。思考を膨らませている時、私はいつも自由だ。色々なことを考える。周りの人をよく見て何を考えているのか考える。記憶をどこまでも遡ってみる。未来について妄想してみる。喋らない代わりに頭の中はずっと忙しく働いている。考えることは楽しい。誰にも邪魔されず、どこまでも行ける。その中でも、より静かでひとりで深く思考を巡らせることができる時間がある。それは数学と向き合っている時だ。

私が数のことをおもしろいと思うようになったのは、小学校6年生の時だった。4年生で不登校になった私の算数の知識は、当時、バラバラに穴が空いていた。6年生の夏、急に、今まで勉強してきたことをきれいに並べ直して穴を埋めたい、そして中学に行ってさらに勉強したいと思うようになった。私は受験のために算数の勉強を始めた。教えられるとやりたくなくなるので、ひとりで解いた。寝ている途中に夢で解き方が分かって、合っているのか気になって起き出して書いてみたこともあった。合っていた。これらが和差算やつるかめ算というような呼ばれ方をすることは後から知った。

遡ってみると、ずっと数のことに興味があったのだと思う。幼稚園の頃、リビングに100までの数の表が貼ってあった。ある日、母が10のかたまりについて説明し始めた。10進法だ。私は10をひとかたまりにするということがどうしても納得できなかった。これは一旦そうと決めないと話が進まないのだけれど、私にはほかの数でも良いように見え、一旦そう思い始めると、ただ覚えるということは難しかった。

また、最近似たような経験をした。「虚数」である。虚数とはカルダノが $x^2 = -15$ を $x = \sqrt{-15}$ としたことから始まっている。私はこれもさっと受け入れることができなかった。

数学を解くためには共通認識として定義がなければならない。けれど、定義が本当にそれでなければならないのか、信用に足るものなのか、気になり出したらそこで止まってしまう。

私は、人よりスムーズに進めない。こうやってあちこちに引っかかるからだ。不器用だと思う。でも、こういう自分を大事にしたい。引っかかって考えて考えて、ずっと考えている自分が好きだ。

でも、虚数については一旦、考えるのを保留にして先に進むことにした。ここを越えなければ、そもそも信用に足る定義なのか確認することもできないし、思考の世界を広げられないからだ。

数学はいつも私を思考の世界へ連れて行ってくれる。数学をずっとやり続けたい。そして、いつか、同じ言語で繋がることのできる仲間と、私の世界をつくっていきたい。

《参考文献》別冊 Newton 「虚数がよくわかる」ニュートンプレス，2020.